

一
礼
万
葉
集

花 万葉集

発行 昭和五十三年七月二十二日
定価 八、五〇〇円

著者 杉本苑子

相馬 大

写真 浅野喜市

発行者 本田欽三

発行所 株式会社光村推古書院

京都市中京区麩屋町通二条上る

電話 〇七五―二二二―〇三六一

振替 京都二二三六

印刷 日本写真印刷株式会社

製本 新日本製本株式会社

万葉の花

相馬 大

花、それは復活への前ぶれとして咲かなければならなかった。だから、古来より「花」は、何ものかの「端緒はなづな（事の始まり）」という意味であるといわれてきた。花は、「みのり」という目標へ向かつての出発として咲くものと考えられてきた。

その「みのり」は、種子・果実として結実することだけではなかった。すべての悲願成就を迎えることをも、その花に求めてきた。古代人は、花だけ咲いて結実しないとき、その花に悪神がやどると考えた。そこには、人々をおびやかす病魔がつくとして恐れた。ふたりの恋が成就しない前兆として忌み嫌った。ことに、農作物の不作の先触れとして悲しんできたものである。

冬の間、枯死していた桜が、花を咲かせて春を知る。だが、桜の花は散りやすい。それで古代人は、鎮花祭はなしずめのまつりをとりおこなって、桜の花の精をなだめた。それは、古代の律令りつりょうに定められた祭儀ともなった。桜の花の早く散る年は、作物のみのりが悪く、大雨・ひでり・台風の年になることを、ながい経験から知っていた。大和の古社では、今でも鎮花祭がおこなわれている。この鎮花祭は、やがて、日本人に花見の風俗を生む。花見、それはその年の大雨・ひでり・台風をうらなう行事であり、桜の花の美しく咲き平穏な年であることを祈り願う重要な年中行事であった。

その万葉びとの前には、豊かな自然がひろがっていた。その自然のなかに咲く花たちとともに、万葉びとは生きてきた。山は、澄みきった空にそびえていた。川は、清らかな音を立てて、万葉びとの足もとを流れくだっていた。馬酔木あしびの花に長寿を祈り、庭園にそれを植えた。馬酔木の花を与えなかったゆえに、弟は短命のまま去っていったと嘆いたりもした。春の野に、娘たちは若菜をつんで羹あづものをつくり、成女せいじょ戒かひの稀人まれびとを待つと、その稀人になりすました天皇すらもあるという神話の生きていた時代である。

この万葉びとも、和銅三年の平城京遷都により、大きく変わっていった。花も、しだいに心をとざして、美の対象にと変化していった。中国の新文化の流れが、万葉びとをかえていったのである。撫子なでしこや紫陽花しきいの花に、その時代の謀反計画も秘められていった。しかし、万葉びとの多くは、なお神話の時代を信じてでもいるかのように、その花に自分の心を託しつづけていた。柳の枝をさして根づけば、その恋が成就すると信じた。笹の葉のさやぎに、ふるさとにいる妻の肌を思いえがいて、ひたすら逢う祈りに満たされていった。

緑の松も、また神々を迎える賀の花、祈りの花とした。また、花は邪靈を去らす呪の花として、棟の花を軒端にみたり、桃の花を飾つたりもした。野山に咲く花たちは、そのまま摺り染めにもされた。露草も山藍も、そうであつた。また、大きな歴史の流れの中にも、花は咲いた。葛の花によつて戦乱の結果を、民衆はうったえたりもした。黄葉の茂る林の中へ死者の霊がおもむくと信じて、黄葉する林や山にむかつて死者の名を呼びつづけたりもした。

その万葉びとと花たちとの共存する姿が、どんなものであつたかを考えてくるとき、花は植物ではなくなつていた。万葉びとに求められることによつて、万葉の花たちは、心をもつて咲かなくてはならなくなつていたようである。

一九七八年五月

目次

見すべき君がありと言はなくに

杉本苑子

7

花 凶版

撮影

浅野喜市

春

17

夏

33

秋

113

冬

129

花万葉集

相馬 大

霞たつ明日

49

すみれ 50

もも 60

やまたづ 70

さきくさ 52

わらび 62

うめ 72

やなぎ 54

かたかご 64

ふぢ 74

つつじ 56

さくら 66

やまぶき 76

あしび 58

かはやなぎ 68

いちし 78

白たへの衣

81

『花万葉集』文学年表	206
『花万葉集』略系図	212
『花万葉集』文学地図	213
『花万葉集』花名・歌詞索引	218
あとがき	205

今日ふる雪の

さなかづら	176
ささぎ	178
しひ	180
ゆづるは	182
すぎ	184
やまあゐ	186
たちばな	188
あし	190
まゆみ	192
ほよ	194
やまたちばな	196
あふひ	198
まつ	200
つばき	202

175

秋づきぬらし

うのはな	82
くれなる	84
ゆり	86
はちす	88
あやめぐさ	90
あぢぎる	92
わすれぐさ	94
くそかづら	96
はまゆふ	98
ぬばたま	100
つきくさ	102
ねぶ	104
むらさき	106
ほほがしは	108
あふち	110
をみなへし	166
すすき	168
くず	170
もみち	172
むぐら	164
ふぢばかま	162
いね	160
おもひぐさ	158
たまははき	156
なでしこ	146
からある	148
あさがほ	150
はぎ	152
うけら	154

145

表題文字「花」||西本願寺本『万葉集』（お茶の水図書館蔵）より
カラー写真中扉文字||西本願寺本『万葉集』（お茶の水図書館蔵）より
ケース写真||高松塚古墳壁画写真より

見すべき君が

ありと言はなかに

杉本苑子

万葉集には、数多くの花々が登場する。梅のような、斬新な外来の花樹もあり、手入れされた庭に、いつくしみ育てられた園の花もあるが、そのほとんどは山や野、河原地や崖の裾、湖のほとりなどにおのずから咲く野生の草花であった。

当時の自然、日本の四季が、それだけ豊潤な、美しいものだったことが想像されるわけだけれど、なかでもわけて、万葉びとたちに愛されたのは馬酔木である。

奈良公園には、彼らのその、馬酔木に寄せる情感を偲んで、特にそれだけをおびただしく植え集めた一画さえ造られている。わたくしの家にも、たった一本だけ馬酔木があり、春たけなわな今、吹きまくる武蔵野の砂あらしにもめげず、けなげに花をつけているが、奈良公園内の馬酔木たちは、玄関先の植え込みに配されたそんな貧弱な仲間とはちがつて、どれもびのびと、見あげるばかりたくましい。「こんなに大きくなるものか」と目をみはりつつ、原生林の感じさえする樹間の径をたどるうちに、知らず知らず白豪寺の近くへ出てしまった記憶が、わたくしにはある。

花をよく見れば、鈴蘭に似てひと粒ひと粒、壺状にふくらんだ花房である。純白なため、さかりのころの遠目には、ふと、雪とすら見まごうことが多い。近寄って手に取ると、しかし思いのほか感触は乾いて、葩の持つあの、なつかしい柔かさや、しっとりとした湿りが少ない。揺する手につれて、サラサラと軽やかな音を立てるところなど、むしろ花というより小さな貝殻が連想され、これはこれで可憐ではあるものの、「なぜ、ことさらにこの木この花を、万葉びとはいとしんだのか」と、現代人にはいぶかしい。ハイビスカスや、孔雀草など、熱帯種のやや毒々しいまでに華麗な色彩に馴れたせいとか、寂しすぎるほど、地味な印象を受けるのである。

あせびと言ひ、あしびとも訛つて呼ぶけれど、本字に当てれば馬酔木と書く。大和地方の山野に、むかし、たくさん自生していて、人の目に触れる機会が多く、したがって親しみも深まったのだらうし、葉や莖に、ほんのわずかの有毒成分が含まれているところから、牛馬が食べて、しばらくのあいだ酔ったようになる。馬酔木の字を当てる所以だが、そんなことも万葉びとたちを不思議がらせ、特別な関心をこの木に向けさせる力になつたのかもしれない。

わが背子に わが恋ふらくは 奥山の
馬酔木の花の いま盛りなり

(巻10・一九〇三)

どうということはないくせに、この一首など、いかにも春という恋の季節の悩ましさを密度たかく伝えてくる。なだらかな、しかも迫力ある調べに乗って、ここに取りあげられているのも馬酔木の花だ。詠み手の名は不明だが、彼女にとって、恋情の激しいかまりと切っても切れない結びつきを持つ花樹こそは、馬酔木であった。花は、歌を飾る添えものではない。咲きさかる馬酔木の花そのものが、恋にもだえる彼女自身なのである。ほかの花では、おそらくこの詠唱は生まれなかったにちがいない。

河蝦鳴く 吉野の川の 滝の上の
馬酔木の花そ 末に置くなゆめ

(巻10・一八六八)

となるともう、神聖視している感じさえする。

「河鹿が鳴きしきる吉野川の岸で、滝の飛沫に濡れながら咲いていた馬酔木の花だぞ。ゆめゆめ粗末な所に置いたりするな」

との警告は、愛着を超えて厳しく、いささか怖くさえある。吉野上流という清浄な、襖の場所をだぶつて思い泛かべるからだろうか。そのほかにも、

磯影の 見ゆる池水 照るまでに
咲ける馬酔木の 散らまく惜しも

(巻20・四五一一)

など、馬酔木を詠んだ歌はすくなくないが、やはりこの木に関するかぎり、だれの唇もがまっ先に、つぶやかずにいられない一首は、大伯皇女の、弟への挽歌であろう。

磯の上に 生ふる馬酔木を 手折らめど
見すべき君が ありと言はなくて

(巻2・一六六)

絵そらごとでも、儀礼でもない。しんじつ双の眸で馬酔木を捉え、その花に触発されて、われしらずはとばしらせた悲泣の実感だからこそ、千年にも及ぶ時空の距りがありながら、わたしたちを縛つ鮮烈な力がこもるのである。万葉集には、

右一首、いま案ふるに、移し葬る歌に似ず、けだし疑はくは、伊勢の神宮より京へ還る時、路のへに花を見て、感傷哀咽してこの歌を作るか。

と、ただし書きしてある。

大津皇子が死を賜わったとき、なるほど姉の大伯皇女は、斎宮となつて伊勢の大神宮に奉仕していた。しかし任を解かれて帰京したのは、冬もなかばの十一月だから、馬酔木の開花期ではない。途上で花を目撃はできないのである。ただし書きの筆者の、つまりは誤りということになるが、それをうんぬんするよりも、この歌の場合、姉も弟もが、ともに好んだ花として馬酔木に焦点をあてて味わつてよいのではなからうか。遠く幽界に去つた者と、現世に残された者をつなぐ追憶のよすが……。それは生前、弟が賞美し、姉もまた愛した白い花房だった。歌の主体は、「見すべき君」に似て、じつはその「君」と、「吾」とを結ぶ共通の思い出草——馬酔木なのだから……。

○

二人の母は、太田皇女という。天智帝の娘、そして鸕野皇女（のちの持統女帝）の姉にあたる女性だが、成長ののち、姉妹はそろつて父の弟の妻となる。大海人皇子——。叔父と姪の結婚であつた。

夫とのあいだに、太田皇女は男女ひとりずつの子を儲ける。大伯皇女と大津皇子だ。鸕野皇女も男の子を生み、こちらは草壁と名づけられた。子供たちは従姉弟同士であると同時に、異母同胞の間柄にもなつたわけである。

太田皇女は、でも、不幸なことに短命だった。大伯皇女がようやく七歳、大津の皇子が五歳に達した年、愛児のゆく末を心にかけてながら彼女は病没してしまつた。

大海人皇子には、ほかにも幾人もの寵妃がいて、子らも総計では男児十人、女児七人に及んでいる。血の尊貴で競つても、大江皇女、新田部皇女ら天智帝の息女だった妃たちは、太田や鸕野とくらべヒケをとらないし、しかもそれぞれに彼女らは、弓削皇子、舎人皇子らすこやかな男児の生母でもある。姉の没

後、これら強力なライバルたちを抑えて、第一王妃の座を獲得した鸕野皇女の力柄は、したがって尋常ではなかったといえるだろう。後年、大海人皇子が即位して天武帝となったとき、支障なく皇后に配される下地が、このとき早くも用意されたわけである。

記録を総合してみると、どちらかといえば大津皇子は、父親似であつたらしい。反対に草壁皇子は、母べつたりの、少々、過保護気味な育ち方をしたようだ。鸕野皇女の気性は強い。表面にすぐあらわれる勝気ではなく、

深沈にして大度あり。

と、書紀にも評されているような、内に籠る強靱さだった。じつと辛抱よく撓めていて、いざというとき、弓弦の鋭さで外へ向かつて反転する。その切れ味、計量に示す冷徹精緻な頭の働きは、帝位について持統女帝となる以前から、夫・天武をすら瞠目させる凄みを持っていた。

草壁も、だからこの母の資質を享け継げば、ひとかどの青年になつたはずだが、父に似ず、かといって母にも似ぬおとなしい、凡庸な息子であつた。生まれつき虚弱だったことも、草壁から若々しい覇気をうばつたのではないかと思う。掌中の珠にひとしい一人子だし、鸕野皇女にすれば、しかし弱ければ弱いでいっそうの不憫が加わつたことだろう。

天智帝の崩後、大海人皇子によって起こされた壬申の兵火で、近江朝廷は亡ぶ。都はもとの飛鳥にうつされ、天武朝が発足した。新政のスタート……。書紀は鸕野皇后の内助ぶりについて、

始めより今に至るまで、天皇を佐けて天下を定め、毎に侍執の際、すなわち言、政事に及び、毗たす補おぎなふところ多し。

と記載している。

大海人皇子——天武帝の性格は「雄拔神武」の評言通り、はつきりと陽。武の要素が濃いが、鸕野は陰の人であり智の人だ。組み合わせとしては、絶好の妙味を発揮した指導者ではあるまいか。

このまにも子供らはすくすく大きくなってゆく。それとともに天武帝は老境に近づき、清新の気に満ちて第一歩をふみ出した飛鳥浄御原政庁にも、ようやく弛緩がきざしはじめる。さなか、重要課題として提起されたのが皇太子候補の人選問題であつた。

男女十七人もの子がいるといっても母の血統、当人の器量や年齢に合わせて網をしばれば、おのずから範囲は限定されてくる。がぜん、このころになって人々の注視を浴びはじめたのが太田皇女の忘れ形見・大津皇子である。

壬申の乱のさい、すでに十九歳の若者に成長して、戦闘にも参加してめざましい手柄をたてた高市皇子は、年と人物でいえばたのしい皇太子候補だけれど、残念ながら母の出自が低い。胸形尼子娘といつて、地方豪族の出身にすぎない。生母の権威を条件の第一とするなら、鷗野皇后の所生になる草壁皇子こそが、もつとも有力な資格者のはずであった。

そこで、草壁か、大津かの比較になるわけだけれど、バックアップしてくれる母を、とうに失っているだけ大津皇子の足場は弱い。鷗野の睨みをもってすれば、否応なく草壁に決定してよいはずだが、そうはいかないところに天武帝の困惑があった。

草壁皇子と大津皇子の、才幹の相違……。なんとしてもそこに、天武帝とすればこだわらざるをえないのだ。たとえば、

状貌（容姿）魁梧（堂々として立派）にして器宇峻遠（気性するどく、壮大である）。幼年より学を好み、博覧にしてよく文を属る。壮に及びて武を愛し、多力にしてよく劔を撃つ。

と懐風藻には、大津皇子の伝として述べてあるし、また、書紀も、

容止塙岸（姿かっこうはすぐれてみごとだし）、音辞俊朗。……長ずるに及び弁にして才学あり。尤も文筆を愛す。詩賦の興るは、大津より生まれり。

と褒めあげている。言葉はんぶんとみても文武両道に秀で、男らしく風采りりしい魅力じゅうぶんな青年だったらしいとは、推量できる。さらに懐風藻に、

性頗る放蕩、法度に拘らず。節を下して士を礼す。是によつて人、多く附託す。

ともあるところを見ると、いわゆる神妙にかまえた優等生ではなかったようだ。豪放磊落、おりおりは、めをはずす奔放さはあっても、守るべき節度には礼儀正しく、人望もあつたとみてよい。

そんな大津にくらべて、草壁皇子はぱっとしない。いくじなくかすんでしまっている。ここに一つの恋がある。石川郎女という才氣ばしった男好きするお俵なコケットをめぐつて、そのハートを射とめるべ

くせり合つた三角関係のいきさつだが、

大名児を 彼方野辺に 刈る草の
束の間も われ忘れめや

(巻2・一一〇)

と、こんな場合も草壁皇子の吐息はつましい。大名児は、石川郎女の別名だが、野で刈る茅の、束との間隔……そのような短いあいだも、あなたのことを忘れられない可哀そうな私なのですと訴えている。肉体関係があつたのか、そこまでもいつていないプラトニックな片思いか。ともあれ、この訴えに対する石川郎女からの返歌がないところを見ると、どうやら草壁の恋は空振りに終わつたらしい。

ところが、大津皇子となるとアタックへの果敢さがまるでちがう。もともと廷臣相手の派手なスキャンダルで浮き名を流している石川郎女だ。男ぶり抜群の大津皇子に積極的に挑まれて、応じないわけはなかつた。

大津皇子、石川郎女に贈れる御歌一首

あしひきの 山のしづくに 妹待つと
われ立ち濡れぬ 山の雫に

(巻2・一〇七)

石川郎女、和へ奉る歌一首

吾を待つと 君が濡れけむ あしひきの
山の雫に 成らましものを

(巻2・一〇八)

この贈答歌で見ると、二人は他人ではなくなっているし、しかも双方ともに、愛情のポルテージは相当あがっている。つまり浮かれ女相手のはかない恋愛遊戯にさえ、草壁は負け、圏外へはじきとばされてしまっているのである。

○

政情不安の一因とまでなりはじめた皇太子選びの難航——。鷗野皇女はそのさなか、どうしていたろう

か。母性の情とすれば、おりにふれて草壁の立太子を、夫・天武にかきくどいたかわからない。だが、へたにさわぎたてて事をこわす愚も、賢い彼女はよく心得ていた。隠忍して時の熟するのを待ちながら、密偵のたぐいを大津の身辺に放って、ひそかにその動静をさぐらせ、後日、口実に使えるかもしれない失点を一つ一つ、記憶の手帳に書き加えていたようだ。

大津皇子、竊かに石川郎女に婚ふ時、津守連通、その事を占へ露はすに、皇子の作りましし御歌一首

大船の 津守の占に 告らむとは

まさしに知りて わが二人宿し

(巻2・一〇九)

陰險な監視網を張りめぐらされ、女との同衾にまでいちいち気をくばらねばならぬ鬱陶しさが、大津の若さには耐えがたかったのだろう。

「陰陽師の卦の上で何がどう、露見しようとなさら痛くも痒くもないさ。日常生活のあれこれが、細大もらさず筒ぬけであることぐらい、百も承知で二人は寝たんだ」

と、言い放つ語調には、あきらかな憤懣がにじんでいる。

天武帝も、いよいよ決断しなければならなくなった。吉野の離宮に行幸し、草壁、大津、高市、忍壁ら、自身の子息、また、これらも有力候補の内に入る兄・天智の子志貴、河嶋の二皇子らを庭上に集め、たがいに信じ合い、助け合って朝威の顕榮に尽くせと命じたあと、衣服の襟を開いて胸ふかく抱きしめ、「汝らは異腹の生まれだが、今日からは同父同母の兄弟と思え。朕もそのつもりで汝らを平等にいつくしむ。もし、この誓いを破ったら、即座に命を失うだろう」とまで誓約した。

草壁皇子の立太子が確定したのは、それからまもなくだが、決着をつけてもなお、天武帝の心情は大津への未練に揺れうごいていたらしい。書紀、十二年二月の条に、

大津皇子、始めて朝政を聴く。

とある記事が、天武の迷いを端的に現わしている。天皇に代わって朝政を聴く資格は皇太子にしかない。